

はと時計

今年度の全校読書運動のテーマは、「共存・共生」です。2025年は、戦後80年の節目の年になります。しかし米国トランプ大統領の関税問題、ウクライナ・パレスチナ情勢等、現在もなお国家間、民族間の争いは絶えません。一方で現在開催されている「万博」では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、多数の国々の多様な文化が交わり、新たな創造がなされています。多様性を重視するこれからの社会では、人種や性格、性別、学歴、年齢に関係なく、それぞれの人が価値観を認め合う「共存・共生」という考え方が大切になってきます。皆さんもこの機に読書を通して、地球規模で希望を見いだせる社会を実現するために「共存・共生」について主体的に考えていきましよう。

中高生向け9pから
高校生向け16pから

“American Born Chinese”by Gene Luen Yang

Published by First Second

A Chinese-American student moves to a new house, and he is the only Chinese-American student at his school. Meanwhile, the Monkey King is on a quest and a third character is bothered by an annoying Chinese stereotype cousin. This English language comic book was award winning and adapted into a drama series in 2023. There is a Chinese and Korean version but unfortunately, no Japanese version. Try to read it in English!

“Full Cicada Moon” by Marilyn Hilton

Published by Puffin Books

A half-Japanese, half-Black girl moves to a new town and doesn't feel like she fits in. It is 1969, the first astronauts from the US are going to the moon, and she is a 12 year old girl interested in science and making things. She tries to make friends and wishes to be an astronaut. This story is written as a poem. There is also unfortunately no Japanese version. Try to read it in English!

A・H

7/8 月
合併号
松蔭中高
図書館
(編集・眞鍋)
2025.7.16

中学生向き

『ふるさとって呼んでもいいですが6歳で「移民」になった私の物語』ナ
ディ著 大月書店2019

出稼ぎ労働目的で両親とともに家族で来日し、オーバーステイのまま首都圏郊外で育ったイラン生まれのナディ。その後、公立学校に通い、高校在学中に定住資格を獲得。言葉の壁、文化の違い、見えない不安と孤独を通して、著者が自分のルーツと向き合いながら、ふるさととは何かを探しつつ感じた感動の記録です。著者は日々の小さな出会いと体験を通して、自分の居場所を少しずつ見つけていきます。読んだ後は、「帰る場所」の意味を、きっとあなたも考えずにはいられないはずです。

(MK)

『こどもSDGs なぜSDGsが必要なのかわかる本』秋山宏次郎
ほか著カンゼン2020

私たちが当たり前のような暮らしをしている中で、世界では様々な問題が生じていることを自分事として考えられるように、わかりやすい挿絵を用いて説明してくれています。SDGsの目標達成まであと5年ですが、できることは何かを一つずつ丁寧に提案し、

「ちょっと考えてみよう、やってみよう。」
と思わせてくれます。皆さんが大人になつた時に、この地球で誰もが暮らしやすく世界の人々が共存共生できるように、今からたえささやかでも自分のできることを実践してみようという気にさせてくれる一冊です。

『14歳からのSDGs あなたが創る未来の地球』水野谷優編著 明石書店 2022

この本はSDGsの17の目標を、「環境・生物」「社会」「経済」と3層に分類して視覚的に理解しやすくした「SDGsウェディングケーキモデル」に従って書かれているのが特徴です。また「SDGsフロントランナー」という目標達成に向けて活躍する人を取り上げたコーナーや、「SDGsよもやま話」という様々な具体的な取り組みについて取り上げたコーナーが、挟み込まれています。大筋を理解するだけではなく、誰もが楽しく興味を持って読み進められるように工夫された構成となっています。皆さん自身が「未来の地球を創っていく」ために行動を起こす上で、指針となってくれるはずです。

『ほんとうにあった戦争と平和の話』野上 暁監修 講談社青い鳥文庫 2016

平和な日本に生まれ育ち、何不自由なく生活できている私たちですが、ちよつと昔、そして世界では今もなお、国家間の戦争や内戦に巻き込まれて多くの命が失われています。この本は様々な時代、

様々な場所で戦争をくい止め、平和な世界の実現を夢見て行動した人々の¹⁴のお話が掲載されています。どれも短く読みやすくまとめられています。共通するのは「平和」への強い意志だと思えます。どのような状況でも自分の信念を貫く強さが感じられます。誰もが平和で豊かに共存・共生していくには、どうしていけばよいのか考えるきっかけを与えてくれます。(YK)

『市立第二中学校2年C組 10月19日月曜日』椰月美智子著 講談社文庫 2013

朝から髪が決まらない、好きな子に好きって言えない、グループ分けがうまくいかない、全部10月19日の出来事。面倒くさい思春期真っ只中の中2が集まれば、何にもない日だけど、何もないわけがない。それぞれ違う人間がそれぞれに悩みを抱えながらクラスにいる。中2にとつての日常の一コマを描いている、だから何の解決もない。でも、今日が終われば、また、今日とは違う明日が始まるはず。そんな思いを持って読んでほしい。(MT)

『15歳の昆虫図鑑』五十嵐美怜著 講談社 2024

昆虫が好きな女子中学生、吉岡螢子。他とは交わらずに、わが道を行くオタクだったが、ホタルのボランティアという企

画をきっかけに4人のクラスメイトと関わるようになる。吉岡が4人それぞれをある昆虫の特徴に重ねて話すと、ところが面白い。そして4人は、吉岡から自分に向けられた昆虫の話をきいて、自分の本心に向き合い、自分で受け入れるようになっていく。色々な人が共に生きていくためには、まずは自分自身をちゃんと認めることが大事だということに気づかされる一冊。題名に図鑑とあるが、それほど昆虫は出てこないのでも虫嫌いな人でも読めます！(NN)

『ピーナッツと谷川俊太郎の世界 SNOPY & FRIENDS』チャールズ・M・シュルツ、谷川俊太郎著 KADOKAWA 2014

“PEANUTS”に登場するSNOPYを知らないとか、好きではないという人に、私は出会った記憶がありません。たいていの人は知っている。そして、好きか大好きな場合がほとんどなのです。たまに、どちらでもないという人もいますけれど。目にとると、こころが和みます。SNOPYはもちろんのこと、SNOPYと共に在り、共に生きる仲間たちのキャラクターのことが、案外、ぼんやりとしか知らないという人もいるかと思えます。わたしは、そうでした。たとえばこの本のはじめには、「SNOPYはビーグル犬で、自分を犬だと自覚していな

い。ありあまる想像力でいつもなにかを夢想している。」と、紹介されています。SNOOPYと共にいる仲間の紹介も素敵です。エピソードの中で繰り広げられる彼らの会話は、実は子供向けではなく、大人が読んでもなるほど、と思うものがたくさんありました。誰でもひとときの幸せを得る方法はp88にあります。いつも毛布を片手に持つているライナスの言葉です。1学期に「平方根」を勉強した中3生にはp126を見てほしい。生き方としてドキッとしたのはp132です。この本の最後に「スヌーピー・ミレニアム シュルツさんを偲んで」という谷川俊太郎さんの詩があります。シュルツさんとはSNOOPYの生みの親です。その詩には、共に在ること、共に生きることの心強さと温かさが記されていると感じます。この本は、表紙のデザインも素敵で、小さく、手に取りやすく、夏休みのホッと寛げそうな時間に読んでみるとちょうど良いと思います。そして、自分のこころに何が残るか。それを大切にしたいですね。記すまでもないかもしれませんが、詩人である谷川俊太郎さんは「PEANUTS」コミックが日本で出版されて以来、全エピソードの日本語訳をされたとのことです。

(YY)

『風に舞いあがるビニールシート』 森絵都著 文春文庫 2009

この本は、さまざまな仕事や立場の人たちを主人公にした短編集です。登場人物たちは、自分とは違う考え方や生き方を持つ人々と出会い、悩みながらも寄り添おうと努力します。中でも、障がいを持つ人々や外国人、社会的に弱い立場にある人たちとの出会いを通して「ちがいを恐れるのではなく、理解しようとする」ことが大切だと感じました。タイトルの「ビニールシート」は、一見価値がなさそうに見えるけれど、実は大切な役割を果たすものの象徴。人も同じように、一人ひとりに価値があるというメッセージが込められています。「共に生きるとはこういうことか」を、やさしく、そして力強く教えてくれる本です。(AK)

『テラビシアにかけの橋』 キャサリン・パターソン作 偕成社文庫 2007

『テラビシアにかけの橋』は、共存というテーマを、性格のまったく違うジェスとレスリーの友情を通して描いています。ジェスは内向的で慎重、レスリーは想像力豊かで活発ですが、二人はお互いを支え合い、励まし合いながら深い絆を築いていきます。彼らが作り上げた「テラビシア」という秘密の世界では、それぞれの違いを尊重しながら、現実の困難にも立ち向かう力を得ます。この物語は、ただ一緒にいるだけでなく、お互いを理解

し、受け入れ、共に成長することこそが本当の共存であることを教えてくれます。(HB)

『憧れの作家は人間じゃありませんでした 1-4』 澤村御影著 角川文庫 2017-2023

人間じゃない作家と編集者の物語です。シリーズものですが、全4巻なので比較的読みやすいと思います。人外とヒトが入り乱れて人外絡みの事件を解決していく中で、人ならざる者と、人間との関わりを楽しめる物語です。同作家の准教授高槻彰良シリーズもぜひ！(MI)

『海からの贈物』 アン・モロウ・リンドバグ著 新潮文庫 2004

須磨海岸の波打ち際を走ると、まれに面白いものや綺麗なものを拾うことがあります。(こうして海岸で貝殻や漂着物を拾い集める行為は、「ビーチコーミング(Beachcombing)」と呼ばれています。須磨海岸は基本的には「不毛地帯」ですが、台風の後や満月の後には、思いがけない収穫の期待大です)

さて、この本の著者アン・モロウ・リンドバグは、フロリダ沖に浮かぶ小さな島の海岸でさまざまな貝殻を拾います。拾った貝殻をきっかけに、女性であることについて、人生について、自然とともに生きることについて、海辺の小屋でひとり静かに思索を繰り広げます。外は嵐。

内省的な時間が流れる海辺の小屋の空気が伝わってきます。生涯を大きく俯瞰してものごとを見る考え方は、チャールズ・リンドバーグ（初の大西洋単独無着陸飛行を成功させた「翼よ、あれがパリの灯だ！」の人）と結婚し、自身も飛行士であったことも影響しているのかもしれませんが。

妻として、母として、当たり前のように家族の中にいる存在である一方で、彼女は夫や子どもとともに生きる「ひとりの人間」であるということを見つめ直します。あなたは、自分の家族に対して、「共に生きるひとりの人間」という見方をしていますか？

(HM)

『となりのアブドラくん』黒川裕子 講談社 2019

学校から家までの帰り道、日本語以外を聞く機会が増えた。電車で、バスで、近所のスーパーで、観光とは関わりない日常の場面で、異なる国籍（であろう）人たちとすれ違う。言葉も文化も異なる人たちと、私たちは地域の共同体のなかで共に生きていくことができるのだろうか。その答がこの本にあるかもしれない。

作者は『奏のフォルテ』の黒川裕子さん。ちよつと斜に構えた「よい子」を書くのがとても上手い作家さんである。主人公は小学校6年生、あみぐるみが好きな男の子だ。ある日、彼のクラスに日本語

を話せないパキスタンからの転校生がやってくる。

「知ること」の大切さがわかる一冊。

(TM)

『おおかみこ』雨と雪』細田守 著 角川文庫 2012

この物語は、「人間」と「オオカミ」の両方の性質を持つて生まれた兄妹、雨と雪の成長と選択の物語です。都会から田舎へ移り、自然と共に暮らす中で、雨と雪は「自分は人として生きるのか、それともオオカミとして自然の中で生きるのか」という、深い選択に直面します。この作品は、他者との違いを受け入れ方、自然との向き合い方、自分らしく生きる生き方とは何かを優しく問いかけてきます。「自分らしい生き方とは？」と悩んだときに、ぜひ手に取ってほしい一冊です。

(PN)

『13歳から分かる！ 7つの習慣 自分を変えるレッスン』『7つの習慣』編集部 著 日本図書センター 2020

基本的にこの本は、「どのような習慣を身につければ、人生がより豊かになり、自分らしい道を歩んでいけるか」という、日常の心構えについて書かれたものです。今回のテーマ「共存・共生」を考えるうえでこの本を紹介したい理由は、それを実現するにはまず自分自身をしつかり持ち

つつ、他者を尊重する力が必要だからです。

『7つの習慣』では、自分をコントロールする力（主体性や目的意識）に加え、他の人と信頼関係を築くための考え方や行動（たとえば、Win-Winの考え方や共感的傾聴）も紹介されています。たとえば第4の習慣「Win-Winを考える」では、自分だけが得をするのではなく、お互いが幸せになれる道を探すことの大切さが語られています。これはまさに、多様な人と共に生きていく「共存・共生」の考え方そのものだと思います。

この本は、「他者のことを考えずに行動すると、相手は動いてくれないし、自分の思いも伝わらない」ということを教えてくれます。だからこそ、相手を理解しようとする努力や、自分だけの考えにとらわれない柔軟さが大切であると気づかせてくれるのです。また、『まんがでわかる7つの習慣』という漫画＋説明という他のシリーズもあります。友人関係やプロジェクト学習など、日常のさまざまな場面で役立つヒントがたくさん詰まっているので、「普段の習慣を少し見直してみたいな」と思っている人には、ぜひおすすめしたい一冊です。

(HS)

『風の谷のナウシカ』17 アニメージ
コミックスワイド判 宮崎駿著徳間書
店 1989-1997

ナウシカは、争いと破壊の中で、すべての命を守ろうとする意志を貫きます。深い哲学と物語が展開されるこの作品は、「共存共生とは何か」を本質的に問いかけています。自然との調和、多様性の尊重、戦争と和解など、映画では描ききれなかった壮大な思想と感動があります。

(HK)

『猫の事務所』宮沢賢治作 黒井健絵
偕成社 1994

猫の事務所の書記の中に、一匹の『かま猫』がいました。『かま猫』とは、寒さに弱くて、夜かまごの中に入って眠るため、体が「すす」で汚れている猫のことです。『かま猫』は猫仲間から嫌われていて、事務所でも白猫、虎猫、三毛猫といった書記たちにもいつも意地悪ばかりされてきました……。これは宮沢賢治の作品ですが、黒井健のあたたかい雰囲気絵にも癒されます。『かま猫』のようにつらい思いをする存在がない世の中であって欲しいと願います。

(NO)

『ぼくたちはChatGPTをどう使うか—14歳から考えるAI時代の学び—』
西岡竜誠監修 東大カルペ・ディエム
著 三笠書房 2025

今やAIの技術と「共生」していく時代ですね。この本は、中学生向けに、そのメリット・デメリットがイラスト入りで分かりやすく説明されています。もしかしら、感想文の課題などをChatGPTに手伝ってもらおうとしたことがある人がいるかもしれませんね。でも、この本に書かれている通りChatGPTが一般的になった今でも、ChatGPTには頼れない、自分の力でしかできないことがあり、ChatGPTを使う側が身につけなければならない力があります。つまり、ChatGPTに端的な解答を求めるのは大間違いで、「参考にして、自分で思考し、判断していく」ということなんです。ChatGPTを使ったことがある人もまったく知らない人も、ぜひ読んでみてください。

(ちなみに、普段あなたたちと接している先生方は、ChatGPTの解答をそのままコピーしたような感想文はすぐ見抜きますよ！間違ってもコピーで感想文を作らないようにしましょう!!)

(KY)

『たのしいムーミン一家』トーベ・ヤン
ソン作 山室静訳 講談社青い鳥文庫
2014

共存・共生の土台には多様なものを受け入れる想像力があると思います。その意味では、数あるムーミンの本の中でも、本作は、魔法のぼうしが引き起こすさま

ざまな珍事件やたくさん魅力的な登場人物たちに彩られ、私たちの想像力のはるか上をいく作品になっています。ややこしい理屈は抜きにして、ヤンソンの豊かな想像力にひたってみてはいかがでしょう。

(HW)

『いま、戦争と平和を考えてみる。』太宰
治ほか作 くもん出版 2009

戦争に関する短編作品が収められています。宮沢賢治さんの『鳥の北斗七星』、太宰治さんの『十二月八日』、峠三吉さんの『原爆詩集』、原民喜さんの『夏の花』、永井隆さんの『この子を残して』、林芙美子さんの『旅情の海』です。中学生のみなさんが読みやすいように、分かりづらい言葉には説明が付けられています。

今年、戦後80年を迎えますが、世界には争いが絶えません。「共存・共生社会」と口では言いつつも、他の人に優しくあれない社会そして自分がいます。だからこそ私たちは、過去の出来事・過ちから学ぶ必要があると思います。「人が人であることが失われる戦争はしてはならない」ということを訴え続け、本気で共生社会の実現に向けて取り組まねばならないという思いに立たされます。

『ムーミン谷の彗星』トーベ・ヤンソン
作・絵 下村隆一訳 講談社青い鳥文庫
2014

「彗星によって地球がほろびる」と聞いたムーミントロールたちが、そのことを

詳しく調べるため冒険の旅に出るというお話です。私が印象に残っているのは、旅人であるスナフキンがムーミントロールに向かって「スノーク」について話すシーンです。スナフキンはスノークの姿がムーミン達に似ていることから、両者は親類だろうと伝えます。スナフキンによると、スノークには興奮すると色が変わるという性質があるらしいのです。それを聞いたムーミントロールは怒った目つきで「そんなやつと親類なもんか。」と答えます。自分たちと姿形は似ているけれども、性質や文化そして価値観が違うということとで差別化しようとする私たち人間の姿と重なりました。結局、ムーミントロールとスノークたちがどんな関係になるかはご自分で確認してください。物語には個性豊かな登場人物がたくさん出てきます。世界の終わりという絶望的な状況でありながらも、各々が自分らしさを発揮してのびのびと振舞う姿が不思議でもあり、面白いなと思われました。

(RU)

『シンガポールを知るための65章』田村慶子著 明石書店 2021

国際的にも重要な地位を占めるに至った小さな都市国家シンガポール。土地も資源も限られている多民族・多文化の小国がどのようにして発展を遂げたのか非常に興味深い。歴史、経済、政策、カルチャーなど幅広いトピックのほかに、コ

ロナ禍での経済危機、ロックダウン等、現地の最新情報も知ることができる。高校2年の海外研修で訪ねることになるシンガポールについて、観光地としての側面だけでなく、歴史や経済など、どのような国であるかを把握した上で現地に赴いてほしい。

(TH)

『狙われた国と地域 ①ウクライナ』稲葉茂勝著 あすなろ書房 2023

全部で30ページの、たくさん写真が入っている本なので、読書が苦手な人でも読みやすいとおもいます。学生のころわたしは社会科が苦手で、克服できずに今に至ります。こんなにかかりやすい本に出あえていたら、地理や世界の歴史がもっと得意になっていたかもしれないナ：とちょっとくやしい気持ちでいっぱいです。

今回は「①ウクライナ」を紹介しますが、②台湾③韓国④パレスチナも図書館にあります。なぜ狙われているのか、詳しく描かれているので、興味のある人はぜひ手にとってみてください。

(MT)

『親子で学ぼうしたらお金持ちになれるの?』橘玲著 筑摩書房 2024

当たり前ですが、お金はとっても大切です。どのように共存・共生するべきか考える良いきっかけになる本です。「この本の目的は、家庭という安全な場所

子どもが市場経済(他人の世界)のルールを体験できるようにすることです。」と、冒頭に書かれている通り、お金に限らず、人間関係や仕事についても非常に重要な視点を提供してくれます。

(TS)

『あなたの言葉を』辻村深月著 毎日新聞出版 2024

「毎日小学生新聞」に連載されたエッセイを一冊の本にまとめたものです。皆さんご存知の辻村さんが「どうして子どもの気持ちに分かるのか」が記されています。優しい語り口と内容に「僕は分かっているし、いい言葉のうまく出ない」「ぼく」や「あなた」にお勧めの本です。

『中学生から知りたいウクライナのこと』小山哲・藤原辰史著 ミシマ社 2022

数年前に時間をかけて読みました。「ウクライナ」が歴史的にどのような「土地」だったのか。それが分かったらいろいろなことが見えてきました。今の世界を知るために中学生はもちろん、高校生にもお勧めします。

『愛犬との幸せなさいごのために 必ずずくるお別れのときに後悔しない知識と心構え』俵森朋子著 河出書房新社 2021

この春に17年一緒に過ごした犬を亡くしました。高齢になってきた犬を見るにつけ、買うか買わないか迷いながらも

2年ほど前に購入し、結局何度も読みました。人間との共生はもちろんですが、犬や猫といった「家族」との共生・共存を考える材料として中学生に推薦します。私はこの本で救われた思いがします。

(KY)

『犬のココロをよむ 伴侶動物学からわかること』菊水健史・永澤美保著 岩波科学ライブラリー 2012

子ども時代のことで恐縮だが、家族は私が生まれる前に「まる」と名の犬を飼っていた。小学生になって犬を飼う友人がうらやましくなり、自分も犬を飼いたいと言ったが、親は決して首を縦に振らなかった。理由は、「まる」が死んだときの衝撃がとて大きかったからだ。家族の一員として長年共に暮らしたペットを亡くしたとき、その喪失感は家族同様にとてつもなく大きい。人が伴侶動物（コンパニオンアニマル）と人生を歩むとき、人が感じる幸福だけではなく、動物自身の幸せも追求すべきことは飼い主の当然の責任である。飼い主と伴侶動物は常に共にある。動物福祉という言葉もある。犬にも幸せに生きる権利がある。

(NA)

『エルマーとりゅう』ルース・スタイルス・ガネットさく ルース・クリスマン・ガネットえ わたなべしげおやく 福音館書店 1997

9才の男の子エルマーが、囚われたりゆうの子を助けに行く『エルマーのぼうけん』は、みなさまご存知でしょう。こちらはその続編、一人と一匹の、次なるぼうけんです。

自由を取り戻したりゅうと一緒に、家をめざすエルマー。ところが嵐に巻きこまれて、カナリヤたちが暮らす見知らぬ島にたどり着きます。

助けた男の子と、助けられたりゅうと、新たに助けを求めるカナリヤの王様と大勢のカナリヤ。だれもかれもが違う姿かたちと立場ですけれど、みんなで力を合わせ、同じ目的にいどみます！

『アイヌ神謡集』知里幸恵「編著」中川裕補訂 岩波書店 2023

日本にも、海外にも、昔から語り継がれてきた物語があります。その中でアイヌの物語には、北の大地で神様と人間が互いを必要なパートナーとして、持ちつ持たれつ生きてゆく世界観が描かれています。鳥や獣が矢に射られるのは、自分で作れないその矢が欲しいから、という考え方は、とても興味深く新鮮です。伝統的なアイヌの文化が息づく物語を、比類のないうつくしい表現で訳したのが、『アイヌ神謡集』です。

人々を取り巻き、関係するすべてが、みずみずしい文体で語られています。

『世界ではじめて人と話した犬ステラ』クリステイナ・ハンガー著 岩崎晋也訳 早川書房 2022

言語聴覚士のクリステイナは、言葉が遅い子供の支援がお仕事です。子犬のステラと暮らし始める中で、話しかけられた言葉に対する子供と子犬の反応が似ていると気づきます。「同じように支援をしたら、ステラも言葉を扱えるのでは？」と考え、実践を開始。押すと言葉を発するボタンを使つて、犬とヒトが、新たなコミュニケーションの探求に挑みます。

言葉を話せるクリステイナと、言葉を話せないステラが、言葉を用いて気持ちを通じあわせてゆく日々。その光景は、歴史的にも長く友であり続けた犬とヒトとの、素敵な未来を感じさせます。

(RI)

『種をまく人』ポール・フライシュマン著 片岡しのぶ訳 あすなろ書房 1998

アパートの間にあるゴミだらけの空き地に、一人の女の子がマメの種をまきました。それをきっかけに、国籍も年齢も異なる人たちが、空き地に畑を作り、種をまき始めます。レタスでひともうけしようとするタクシー運転手や、別れた彼女が好きだったトマトを育てる青年。種をまく思いはそれぞれ違いますが、それまで接点のなかった人たちが、次第にお互いを知り、時には助け合うことも。人

とのつながりによって心が温かく満たされる感覚を、じんわりと味わえます。

『スクランブル交差点』 佐藤まどか作 小学館 2023

「熱くなると、ろくなことがない」と何事も適当をマイルールとしている高校1年の強。そんな彼のクラスに、やたら熱くて全力疾走型のイタリアからの留学生・マルコがやってきた。パワー全開のマルコに巻き込まれ、強の「まあまあ路線」は次第に揺らぎ、周囲との関係に真剣に向き合うようになります。異なる価値観を互いに受け入れながら育む友情や進路の悩み。みなさんと同じ年代の登場人物たちが抱く感情は、共感できる部分が多いのではないかなと思います。テンポよくスピード感があるお話なので、どんな読み進めることができますよ。

『僕には鳥の言葉がわかる』 鈴木俊貴著 小学館 2023

この本は、シジュウカラの鳴き声を研究し、鳥の言葉を解明した研究者によるエッセイです。「研究者の書いた本」と聞くと難しそうな印象があるかもしれませんが、この本は違います。鳥が好きでたまらない気持ちがあふれていて文章はユーモアたっぷり。研究へのワクワク感も伝わり、読んでいて楽しくなります。人間も動物の一員でありながら、自然との関わり方が「共生」から「利用」へと変わってしまった現状。改めて動物たち

の世界を共有し、自然と共存していくことを考えたい一冊です。(NF)

『ヤクバーとライオン(1) 勇気』 ティエリー・デデュール作・絵 柳田邦男訳 講談社 2008

アフリカ奥地のとある村。少年ヤクバーは、大人になるため、ひとりでライオンに立ち向かい槍で倒すことで、勇敢な兵士であることを示さなくてはならなかった。しかし、ヤクバーがようやく出会ったライオンは、瀕死(死にかけていること)の状態。弱っている相手を殺しているのか、それで本当の勇気といえるのか。ヤクバーがとった行動とは。フランスの画家が描いたモノクロの絵に、はじめ違和感を持つかもしれないが、その強烈な黒い絵とこの少年の物語に心がぎゅっとつかまえられます。絵本の形をとってはいますが、内容は中学生にふさわしいと思います。2巻「信頼」も出ています。

『元氣? 世界の子どもたちへ』 長倉洋海著 朝日新聞出版 2023

世界の子どもたちの写真を撮り続ける写真家・長倉洋海さんの集大成ともいえる本。表紙の男の子(ネパール)の鼻水をたらした表情にひきつけられます。長倉さんは、題名になっている「元氣?」を魔法の道具のようにして話しかけ、最初のコミュニケーションを始めるそう。ほっ

pegが日に焼けたアフガニスタンの少年アクトバルが鉛筆をうれしそうに持つ様子、予防注射が打てなかったために足が自由になつてしまったアンゴラの少女ナキンドーのすてきな笑顔など、世界の子どもたちの魅力あふれる写真がたくさん載っています。長倉さんのすばらしい写真と文章を読み、世界の人たちを知る第一歩にしてください。

『家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった+かきたし』 岸田奈美著 小学館文庫 2023

中2で父親を急性心筋梗塞で亡くし、病氣の後遺症で車いすを使う母親と、ダウン症の弟・良太と暮らす岸田奈美さんによるエッセイ集。「弟が万引きを疑われ、そして母は赤べこになった」「母に「死んでもいいよ」といった日」など、タイトルだけでも興味をひかれる。クスツと笑える場面、つつこみがたくさん入った文章の中に、障がいのある人が暮らしやすい社会になつてほしいという、岸田さんの真剣な思いと願いが表現されている。「大丈夫じゃない日々」をどうのりこえてきたかが、ユーモアにあふれたテンポのいい文章で綴られており、よみやすいが、それだけでなく、人生のヒントももらえる本。(KO)

『ももちゃんのピアノ 沖縄戦・ひめゆり学徒の物語』柴田昌平文 阿部結絵
ポプリ社 2022

ももちゃんはピアノが大好き。でも家では買ってもらえないから紙に白と黒の鍵盤を書いて、机に置いて練習していった。勉強さえすれば、ピアノを弾かせてもらえるというひめゆり学園に入学しますけれど、楽しい学校生活も、戦争が始まってどんどん壊れていくのでした。ひめゆり学園の生徒たちにはがをした兵隊さんの看護にあたるような命令がくだります。戦場での卒業式。そして大好きな先輩の死。アメリカ軍に取り囲まれているのに、信じられない命令がくだります…。

わずかな偶然で生き残ったももちゃん。ボロボロのすがたになって生きろといってくれた音楽の先生は戦死しました。そのときのひめゆりの生徒たちの平均年齢は16歳でした。なにがあったのか、日本人として知っておいてほしい出来事です。『パンツ・プロジェクト』キャット・クラーク著 あすなろ書房 2017

高校に入学したリヴはどうしてもスカートをはきたくない。「男子はズボン、女子はスカート」と決まっている制服がどうしても許せない。スカートをはいっている自分が自分らしくないと感じているのに、誰に何をいえばいいか、どうしたらいいかわからない。あるとき自分の家はお母さんが二人と言ってしまったことからいじめが始まる。信じていた親友が離

れていたり、思わぬ味方が現れたり、落ち込みながら、失敗しながら「パンツ・プロジェクト」の仲間を増やしていきま。友だちって、家族って？一緒に生きる喜びって？

『父さんはどうしてヒトラーに投票したの？』デイディエ・デニクス文 PE
F絵 解放出版社 2019

父さんは彼だけがドイツを救えると信じて投票したのでした。けれど政権をとった彼の悪口を言った肉屋は取り囲まれて殴られ、批判した本は焼かれ、ペットはどこかに連れて行かれ、帰ってこない。そして次は人間が！

ヒトラーは民主的な選挙で選ばれました。これは現実のデータを物語にしています。人種差別がどのような結果をもたらすのか。差別される範囲がどんどん広がって、やがて破滅します。人種差別する自由なんかない。人種差別をする政党に投票する恐ろしさを描いている本です。(YM)

中高両方

『生きるための選択 少女は13歳のとき、脱北することを決意して川を渡った』パク・ヒン著 辰巳出版 2015

13歳の少女が、自らの意思で祖国を離れ、命がけで川を渡った。この本は、自由と尊厳を求めて生き抜いたひとりの少女の真実の物語です。厳しい現実の中でも希望を捨てず、困難に立ち向かう姿は、私たちに「生きるとは何か」「自由とは何か」を深く問いかけてきます。

勇気と決断、そして人間の強さを知るためにぜひ手に取ってほしい本です。2015年に発売された本ですが、こんなに近代化された世界にあつて、まだそんな状況があるのかと衝撃を受けた1冊で、内容を今も忘れることができません。あらためて、自分たちの恵まれた環境を考える良い機会になりました。(MK)

『発達障害・グレーゾーンかもしれない人のための「ミユカ」』中村郁著 大和書房 2025

現代では、人との関わりにおいて、自分をどう表現するか、また、他人をどう理解するかが難しくなってきました。私自身、自分勝手に話を進めてしまったり、人の話を聞かなかつたり…と、人とのコミュニケーションに日々悩み、反省し、苦勞しています。自分自身にも多かれ少なかれ、あてはまるこの特性を何とか理解し、上手にあつかえないかと、この本を手に入れました。22年間、愛されて仕事

が途切れない、人気ナレーター・声優の著者が自分自身の経験をいかして編み出した、発達障害の特性の「得意」を生かし、「不得意」をカバーするコミュニケーション術が書かれています。発達障害の当事者だからこそ「あるある！」エピソードと、特性を克服するための具体的な手法がたくさん書かれています。日々のコミュニケーションに困っている人も、困っていない人も一度読んでみることをお勧めします。

(TA)

『ほたるいしマジカルランド』寺地はるな著 ポプラ文庫 2023

遊園地を舞台にした短編集。それぞれの物語に登場するのは立場・背景の異なるさまざまな人たち。ほんの少し相手を気に掛ける、そっと相手に寄り添う。そんな日常の小さな思いやりが、「共生」であると気づかされるお話が沢山あります。そして舞台のモデルは大阪の「ひらかたパーク」。読み終えたあと、実際に訪れたくなります！

(HT)

『ゼロからの読書教室』読書猿著 NHK出版 2025

何かあれば、すぐに「読書」「本を読め」と言われるが、読書の方法とか教えてくれる人はいません。なかなか「本を読もう」とは思わないものです。この本の第1部のタイトルは、本となかよくなるために……しなくてもいいこと、してもいいこと。全部読まなくてもいい、はじめから読まなくてもいい、最後まで読まなくてもいい、途中から読んでもいい、すべてを理解できなくてもいい、小説なんて読まなくていい、など、読書は自由でいいのだ、と教えてくれます。

もし、このように言ってくれば、読書のハードルは低くなります。と、いいながらも、この本の第2部はむしろかしいので読まなくていいです。

(HK)

『食堂かたつむり』小川糸著 ポプラ文庫 2010

菜食主義者であるインド人のボーイフレンドの窃盗と失踪により、全てを失った倫子。唯一残されたのは祖母の大切な形見である、ぬか床。失意のどん底にある彼女は、そのぬか床を胸に、十数年ぶりに故郷の山里に戻り、一日一組限定の食堂、「かたつむり」をオープンさせます。

頂く命に誠実に向き合い、丁寧に食事を提供する倫子。彼女が提供する料理を通して、確執があつた母親との和解、他者とのつながり、人と動植物との共生、そして倫子自身の成長と再生が静かに、そして優しく描かれています。

「人が食材を用意し、下準備をし、調理し、供し、人がそれを食べる」という半ばシンプルに見える人間独特の行為の中に、いやいや真逆の深淵で様々なものを生み出すエネルギーがあるのだと感じさせられました。

(RB)

『35年目のラブレター』小倉孝保著 講談社文庫 2024

幼少期、和歌山の山間地で極貧の暮らしをしながら、何時間もかけて小学校に通う。その学校でも「貧乏人」「バカ」といじめられ、小学校2年生の途中から一切学校に行かず、読み書きもできないまま大人になった西畑さんの物語です。読み書きができないことを恥じ、それを隠し続けながら生きることの苦しさ、何とか結婚できた奥さんにもそのことを隠すしんどさ……そんな中で、もう読み書きをすっかりあきらめて老年を迎えた西畑さんは、ふとしたことで「夜間中学校」の存在を知ります。64歳にして初めて字を習い始めた西畑さん、その一番の動機は、ずっと支えてくれた奥さんにラブレターを書くこと。

今も夜間中学は私たちの周りにあります。そこでは、様々な事情で「学ぶ」ことから遠ざけられた大人の人たち、高齢者、外国籍の人たちが、必死に勉強しているのです。そんな現実を知るだけでなく、立場の弱い人たちを支えるたくさんの人たちがいることにも気づかされます。「やつぱり、人間っていいよな」と、ふと思わされるお話です。映画にもなっていますよ。

『青い鳥』重松清著 新潮文庫 2010

物語の主人公が吃音(言葉がつかえてうまく話せない)国語の先生だという異色の設定。重大なイジメ事件が起きた学校。自殺未遂生徒が出たクラスで、生徒や教師が「とりあえず」反省し次に進もうとする、その安易さが彼にはもどかしく、許せない。「反省文」を書いたら「はい、終わり」でいいのか!「イジメは悪いことですよねー」はいい。わかりました。それで分かったってことにするのか!最初はどもりながら話す先生を、生徒はバカにしています。しかし、だんだんと彼のたどたどしい言葉の中に、人として大事なことを感じ取っていきます。私なら、そしてみなさんなら、そんな「たどたどしい言葉」の中に大切なものを発見できますか?

このお話は映画にもなっています。映画もなかなかです。いじめ問題を扱った小説や映画で、これを超えるものはないと私は思っています。(AN)

『ぼくは猟師になった』千松信也著 新潮文庫 2012

『お金に頼らず生きたい君へ』廃村「自力」生活記(14歳の世渡り術) 服部文祥著 河出書房新社 2022

俳優・猟師の東出昌大が、山で暮らしている。かつてプライベートのスカンダルが報じられ、その言動が物議を醸し、世間から批判を浴びた彼のその後を追っ

『The Hunger Games』Suzanne Collins 著
メディアファクトリー文庫 2012

Katniss Everdeen, a girl with various skills and knowledge of the woods, must face the ultimate test of survival in the annual Hunger Games televised event. This event forces citizens of two districts to fight each other to the death. For those interested in a thrilling story with twists and turns when you least expect it, this novel is for you! Get to know Everdeen's backstory and what leads the characters to the Hunger Games. Enjoy the ride!

(S・M・U)

たドキュメンタリー映画『WILL』では、社会と距離を置き、山小屋で暮らす姿が映し出される。地元の猟師たちとの交流や山での生活を、カメラは淡々と捉えていく。

一方で、俳優として再び関わることになった作品―映画『福田村事件』や舞台『悪魔と永遠』―が、他者を理解し共存することの難しさや、罪と罰を抱える生き方をテーマとしている点も興味深い。

MOROHAの歌が流れ、生身の心が抉り出される。

作中に登場する妙に迫力のある人物の一人が、登山家・文筆家・猟師の服部文祥さん。彼は、食料や燃料をすべて現地で調達しながら登山を行う「サバイバル登山」を極めた後、築100年の古民家を拠点に、できるだけお金に頼らずに暮らしている。ただしそれは、都市生活があるからこそ成立する田舎暮らしであり、この国の一部地域でのみ可能な限定的な生活形態であるということも、彼は自覚的に語っている。そのスタンスには、単なる自給自足や田舎礼賛を超えた、文明との距離感を問う哲学がある。

また、東出さんが直接影響を受けた一冊が、千松信也さんの『ぼくは猟師になった』。伊丹の「わんぱく少年」だった著者が、どのようにして猟師という生き方になったのかが赤裸々に綴られている。京都の某大学の学生寮でのエピソードや、鹿肉をカッパ麺にぶち込んで食べるといったワイルドな描写も臨場感たっぷり。意識高い系の田舎暮らしスローライフ本ではない。彼らに共通するのは、「自分が食べる肉は、自分で責任をもつて調達する」という考え方。スーパーストックコーナに整然とパックされた肉に違和感を覚えるようなら、もしかしたら、あなたの中の「猟師」が目覚めるかもしれない。

ちなみに、「水曜日のカンパネラ」の初代ボーカル・コムアイさんも、その考え方に通じている人物です。(HM)

『ツバキ文具店』 小川糸著 幻冬舎文庫 2018

主人公の鳩子(はとこ)は、文具店を営業しながら他の人の手紙を代わりに書く、代書屋という仕事をしています。個性豊かな登場人物との日常と、少し変わった代書の依頼を中心にストーリーが進んでいきます。手紙の内容としては、友人への絶縁状や、借金のお断り、天国からの手紙など様々です。主人公は、言葉選びや文字の書き方など細かい所にこだわって、依頼者の心に寄り添いながら自分の人生についても少しずつ考えを深めていきます。ぜひこの本を手にとって、登場人物同士の関わりや生き方を感じ取ってみてください。(MK)

『ほつ』と『する言葉55』 スマイルファクトリー著 三笠書房 2008

忙しい毎日、他人とのちよつとした行き違いや、自分を責めてしまう瞬間はありませんか？『ほつ』とする言葉55は、そんな心のすき間をやさしく埋めてくれる、シンプルだけれど深い「言葉の贈り物」です。この本に登場する言葉の一つひとつは、他人

と比べないこと、自分と違う考えを尊重すること、そして誰かの存在を認めることの大切さを静かに語りかけてきます。それはつまり、「共に在る」ことの意味——共存と共生の姿勢に他なりません。人との違いを恐れず、やさしい目で向き合い、支え合う。そんな思いやりの心を、読むたびに思い出させてくれる一冊です。今、自分にも誰かにもやさしくなりたいと思うすべての人におすすめします。(YK)

『透明なルール』佐藤いつ子著 KADOKAWA 2024

人にどう思われるか気になる人にお勧めの本。(FT)

『話を聞かない男、地図が読めない女』アラン・ピーズ、バーバラ・ピーズ著 主婦の友社 2000

筆者は「男女の違いは、脳の構造の違いによるものだ」と主張し、様々な実例をユーモアたっぷりに教えてくれます。例えば「女性が相談をする時は、ただ話を聞いてほしいだけである(解決してもらいうことは目的ではない)。男性は、相談を受ける」と「問題を解決してあげたい」という思考が働いたため、解決策を提案したり相手が分かっていることを理解させようとしたりする。」などです。現代では多様な性のあり方が存在しますし、本書の内容が全ての人に当てはまるわけでは

ありません。しかし、「他者との違いを理解して認める」きっかけになる1冊として読みやすい本だと思います。皆さんが、周りの人と少しでも円滑に「共生」していけるヒントを得てみませんか？(AK)

『きょうも、いいネ』に出会えた』岩合光昭著 新潮文庫 2004

動物写真家である「岩合光昭」氏は、いわゆる『猫好き』の中では有名な人物です。彼はたくさんの写真集や本を出し、全国各地で写真展を開催しています。彼が撮る写真の中で猫たちはとても自然体で魅力的な姿を見せてくれています。それだけでなく、彼が写真に添える言葉には、猫に対する愛情と尊敬(?)があふれています。猫好きの人も、そうでない人も、もしよかったら岩合さんの写真集や本を手にとってみてください。癒されること、間違いなしです！(NO)

『問題。以下の文章を読んで、家族の幸せの形を答えなさい』早見和真著 朝日新聞出版 2025

早見和真は私が好きな作家のひとりです。今年も新作を見つけたので早速購入しました。最初は中学受験をめぐる子供たちの話かなと思っていましたが、副題にもあるように家族の物語です。ネタバレになるので全部は書きませんが、主人

公の長谷川十和は、中学受験を控えた小6の夏、家族との関係で心が荒んでしまっています。後半、もがきながらもなんとか前へ進もうとする十和を支える家族の形が見えてきて、伏線が一気に回収されていく物語の展開に驚かされます。(作者の代表作『店長がバカすぎて』のスタッフが登場した時には思わず「キターーーー!」となりました。)

思えば、家族とは、一人ひとり違う個性の人間が集まって同じ時を過ごしている「共生」の最小単位ではないでしょうか。中学受験を経験した皆さんだからこそ、共感できる部分も多いと思います。ぜひ読んでみてください。

『藍を継ぐ海』伊与原新著 新潮社 2024

5編の小説からなる短編集。共通したモチーフがあるように思います。いずれも田舎町が舞台、主人公は不器用だけど、周囲の人に支えられています。そして伊与原さんならではの自然科学の目。

表題になっている「藍を継ぐ海」は、私の故郷、徳島が舞台となっています。ウミガメの卵を一人でふ化させようとする中学生の話。私はこれが一番印象的でしたが、私の家族は長崎原爆を題材にした「祈りの破片」がよかったと言っていました。

周りの人との「共生」のなかで登場人物の心が変わっていく過程を丁寧に描いていて、本当に優しい気持ちになれる一冊

です。じわーっとくる穏やかな感動がありました。みなさんもぜひ読んでみてください。

『ポリぶくろ、1まい、すてた』ミランダ・ポール文 エリザベス・ズーノン絵 藤田千絵訳 さ・え・ら書房 2019

高3の英コミュの教科書My Wayにも掲載されている、アフリカのガンビアという国でアイサト・シーセイさんが始めた活動を紹介した、実話に基づく絵本です。

シーセイさんは仲間の女性たちと一緒に、ごみとして捨てられたビニール袋を再利用して財布を作り始めました。環境問題だけでなく、貧困問題、女性のエンパワーメントの視点もあり、絵本というよりはむしろノンフィクションとして、十分読み応えのある一冊です。(SDGsの目標のうち、3、5、12、13、14、15に関する内容です。)

『ようこそ、ヒュナム洞書店へ』ファン・ボルム著、牧野美加訳 集英社 2023

知り合いの司書さんに勧められて読んでみました。読後、心に優しい余韻がいつまでも残りました。

つらい過去を抱える主人公のヨンジュは、ソウル市内に小さな書店を開きます。そこに集まってくる人たちは、それぞれ悩みや生きづらさを抱えて居場所を求めている人たちです。書店の心地よい包容力の中で、お互いに、やさしさと思いやりで程良い距離感を保ちながら緩やかに

支えあい、皆少しずつ前を向いて歩み始めます。ありのままの自分を受け入れてくれる——「共生」とはこういうことなんです。

日々の生活に少し疲れたと感じたときに読んでみてください。ほっこり心温まって「私は私でいいんだ」と思える1冊です。

(KY)

『やばの缶づめ、宇宙へ行く』小坂康之・林公代共著 イースト・プレス 2022

福井県にある小浜水産高校に赴任した小坂先生。水産高校の先生になる夢を叶えたかと思えたが、そこは荒れに荒れた教育困難校だった。しかし、試行錯誤を重ねるうちに生徒との関係が良くなっている。学校にある缶詰工場が宇宙食に対応している衛生基準をクリアしたときに、「宇宙食、つくれるんちゃう？」とある生徒がつぶやいた。ここから福井のさばが宇宙に行く道のりがはじまる。宇宙食の認定基準や学校自体の存続の危機を乗り越える過程で、生徒・教師・地域住民・JAXAの関係者などが共に手を取り合う様子が胸が熱くなる。

海・魚・食・宇宙・教育などに興味がある人はぜひ読んでください。

(TK)

『踊るジョーカー 名探偵音野順の事件簿』
北山猛邦著 創元推理文庫 2017

推理小説は好きですか。名探偵というと、堂々とした姿で格好よく推理を披露して事件を解決に導くヒーローというイメージがあるかもしれませんが、この作品では違います。この作品で活躍するのは、ひきこもりの、とても気弱な探偵です。助手をつとめる友人に強引に引きずられながら、お弁当を持って、嫌々事件現場へと向かいます。自信がなく、おどおどとした口調で話す姿はかなり頼りなく見えますが、推理の力は本物で、鮮やかに事件を解決していきます。

作者は物理トリックの名手で、今作にも工夫を凝らしたおもしろいトリックがたくさん登場します。短編集なので読みやすく、クスリと笑えるユーモアが散りばめられながら展開していきます（殺人事件は起こりますが……）。ちょっと変わった名探偵と助手のコンビネーションをぜひ楽しんでみてください。（YM）

『子どもを守る言葉「同意」って何？ YES、NOは自分が決める！』レイチエル・ブライアン著 中井はるの訳 集英社 2020

松蔭中学3年生以上の皆さん、本のタイトルとイラストを見て、気づいてくれたら嬉しいですよ。中学3年生の性教育講演会の中で、著者の動画を見えています。

私たちは、学校や社会の中でも、多様な価値観を持つ人と関わりながら生活しています。性に関することだけでなく、相手の「同意する／同意しない」を尊重することの大切さについて考えてほしいと思います。（AB）

『精霊の守り人』上橋菜穂子著 新潮文庫 2007

バルサという女用心棒が、新ヨゴ皇国の第二皇子チャグムを助け、彼を守るために奮闘する物語です。この本は第1作目ですが、その後10巻以上続く長編シリーズです。長くて読めるかな？と思うかもしれませんが、自然と物語に入り込んで行き、次が読みたくなる本です。いろいろな国が出てくるため「共存・共生」について考えさせられます。是非、読んでみてください。（MT）

『エレジーは流れない』三浦しをん著 双葉文庫 2024

のどかな温泉街に暮らしている高校生が主人公です。友人たちと繰り広げる日常やちょっとした事件に巻き込まれたりするお話です。様々な意見や価値観に触れることができると思います。（HH）

“Tanuki Money” (Enjoy Simple English Readers) NHK編 Daniel Stewart 監修 NHK出版 2023

皆さんはラジオを聞きますか（聞いたことがありますか）？ 最近ではスマホのアプリでも聞けるので、ぜひ聞いてみてください。目で見える番組とは違った感触で楽しめます。そういえば、近ごろはAudibleとか言って、小説なども耳で楽しめますね。さて、この本はNHKラジオの“Enjoy Simple English”という番組の内容を1冊のCDブックにまとめたものです。この番組は月曜日から金曜日まで毎日5分間、曜日ごとに「昔ばなし」「偉人伝」「日本文化」など、テーマが決まっています。今回紹介したのは「落語」の回です。全部で18の短い落語が中3レベルの英語で楽しめます。しかも音声付きですからリスニングアップにも最適です。毎日5分間、気分転換にもなります。気に入ったらラジオ番組にも挑戦してください。詳しくはCharley 阪田まで。（MS）

『「命ロシア料理」ピエートル・ワイリ、アレクサンドル・ゲニス著 未知谷 2014

ある日、私の夫が言いました。「今日は、帰れ、鶏肉へー」をつくるから。」その少し前から、SNSで見つけたと言った話をしてくれていた「帰れ、鶏肉へー」…元ネタをあたりたくなって、読んでみました。料理名が「帰れ、鶏肉へー」でないことはわかったけれど、結局料理の本当の名はいちわからない…少し後追いで塩を入れたすぎたので、子供たちはご飯を入れたら

喜んで食べていました。残ったらルーを入れてカレーかな、と思っていたけれど、食べきっちゃった：おいしかったです。本編は、何とも言えない皮肉と悪態がちりばめられています。いちいち、ちくつと入れてきます。スパイシーで、ハラハラします。作者は、1970年代のデータントの時代にロシアから移住したユダヤ系ロシア人（ロシア系ユダヤ人？）です。いろいろあつてアメリカに落ち着き、懐かしいロシアの味を思い出して綴られたエッセイ集です。章の一つ一つが短いのも相まってリズムよく読める読み物となっています。レシピにもそれにまつわるエピソードにも根底には祖国に対する温かい気持ちが見え隠れしています。いろいろ発言が香ばしいですが：「帰れ、鶏肉へー」はある章のタイトルなのですが、そのほかにも、「皮つきの従兄弟」とか、「本物の偽ウサギ」とか、いろいろパンチが効いています。ウクライナ侵攻に対する猛烈な怒りに少し冷静さが戻ってきた今だからこそ、文化そのものをやみくもに否定する狭量さにNOと言えるのではないかと思っただけで紹介してみました。「お茶はウォッカじゃない、たくさんは飲めない。」この言葉を胸に、今日も夫に作ってもらおう（↑ここ、大事。テストに出るレベルです）次なるレシピを選んでいきます。

『中学生から知りたいパレスチナのこと』
岡真理・小山哲・藤原辰史著 ミシマ社
2024

私の仕事柄、この地について語る機会は案外少なくない。つい先日高校3年生に長々と語り、そしてテストでねちねちと問うたばかりである。そのたびに、何を、どう伝えようかと迷っている。何を、どう受け取るべきなのかためらっている。ただ、これまでに感じてきた憤りや違和感が解消するくらい、昔のパレスチナも今のパレスチナも読み解いてくれている。中学生には少しむづかしいかもしれないが、ぜひ、読んでみてほしい。

(SM)

『夜明けのすべて』瀬尾まじ著 水鈴社
2020

「分かれ合えないかもしれないけど、寄り添うことはできる」そんな共生・共存の形が描かれたお話です。PMS（月経前症候群）で感情をコントロールするところが難しい美紗とパニック障害を抱える山添。それぞれ苦しさを抱える、同じ職場の二人が、少しずつお互いを理解し合いながら助け合い、変わっていきます。病氣や生きづらさがあっても、人と関わること諦めなくていい、人と人は支え合って生きていけるということが伝わってくる、心に優しい物語です。(MK)

『樹木たちの知られざる生活 森林管理官が聴いた森の声』ペーター・ヴォールレー
ベン著 ハヤカワ文庫 2018

「最新科学と長年の観察が明かす、木々の驚くべき社会生活37篇。ドイツで100万部！」樹木の能力と社会性！について語られますが、ほんとうにびっくりしました。樹木への愛に満ちていて、とてもおもしろいです。ぜひ！ヴォールレーベンさんは、この本の続編として『動物たちの内なる生活 林管理官が聴いた野生の声』も書かれ、こちらもベストセラーになっているのだそうです。私は未読ですが、読んでみたいと思っています。

『大絶滅は、また起きるのか？』高橋瑞樹著 岩波ジュニア新書 2022

2007年に国際連合生物多様性条約事務局が「毎日、最大150種の生きものたちが、この地球上から姿を消している」というショッキングな見聞を公表したけれど、それ以降も絶滅の速度は加速し続け、現在も生きものは減り続けている。生きものは互いに関係し合って生きていくのに。長い長い時間をかけて「美しい調和」生きものの輪を作ってきたのに。今「生きものの輪」は地球規模で壊れつつある。研究者たちが「6度めの大絶滅」と呼ぶこの現象は、過去5回の大絶滅とは違って、「たった1つの生物種」私たち人間が引き起こそうとしている……。どうすればいいんでしょう？生きものの絶滅について考え、現状を知り、それを食い止めるために私たちにできることを理解しなければ！

『八月の御所グラウンド』万城目学著 文藝春秋 2023

『鴨川ホルモー』『鹿男あをによし』以来ずっと応援している万城目学さんが、『八月の御所グラウンド』でやっと直木賞を受賞されました。よかった！おめでとうございます！この物語でも、万城目さんらしく、日常の世界にふつと非日常が紛れ込んできます。が、その紛れ込み方がいつもよりさりげなくて優しく、心にじんわり沁みてきました。その土地の持っている記憶が時間を超えて現れるってことは、あるかもしれないと思う。私たちは過去を生きた人々とも「共存・共生」しているのだと思う。過去を精いっぱい生きた人々の思いを大切にしたいと思う。直木賞受賞シリーズ第2弾『六月のぶりぶりがつちよう』では「本能寺の変」を扱ってられます。こちらもぜひ！『祖父はアーモン・ゲート ナチ強制収容所所長の孫』ジェニファート・テーゲほか著 原書房 2014

この本には、『共存・共生』とは対極の地点を積極的を目指した側「ナチス」の罪を心に背負う子孫の苦しみが続られています。学び、心を豊かにするには、いろいろな視点が必要だと思います。こちらもぜひ。（『ハンナのかばん』『アンネの日記』未読の人は、そちらを先に読んでください！）（MU）

『ロードス島戦記 灰色の魔女』水野良著 角川スニーカー文庫 2013

剣と魔法が支配するロードス島で、種族や立場の違いを超えて仲間と絆を深めていく若き戦士パーン。違うからこそ、ぶつかり合い、だからこそ信じ合える：ファンタジーの世界で、人と人が本當にわかり合うとは何かを教えてくれる一冊。冒険ものとして心躍るのは当然のこと、争いの中で見つけた「共生共存」の希望が、胸を打ちます。夢中で読み進めながら、気づけば今の世界にも目を向けたくなるはずです。（現在、30周年記念HPが立ち上がっています。）（YO）

高校生向き

『エロロジの誕生』ロバート・クラーク著 新評論 1994

アメリカ初の女性研究者が環境との共生について生涯を捧げた伝記です。100年以上も昔の出来事ですが、今も尚通じるものがあります。

『旅猫リポート』有川浩著 講談社文庫 2017

野良猫のナナと一緒に懐かしい思い出をたどっていく話。悲しいけれど温かい

お話で猫ちゃん好きの人にはたまらない本となります。（MS）

『コンビニ外国人』芹澤健介著 新潮新書 2018

少し古い本なので現状とは少し違うかもしれませんが。コンビニだけでなく多くの現場は外国人労働者無しには立ちいかなくなってきました。今後さらに多文化共生を考えていかなければいけない皆さんに是非読んでもらいたいと思います。（HS）

『夜明けのすべて』瀬尾まいこ著 文春文庫 2023

パニック障害を患う男性山添と、PM S（月経前症候群）を患う美紗。二人は恋人でも友人でもない、ただの会社の同僚だが、互いの発作を誰よりも理解し合っています。少々強引な美紗の行動に振り回される山添も、最後には本来の自分を取り戻し始めていきます。二人のやりとりは決してわざとらしくなく、しかも心から相手のことを思っている言動なのですが、息のあった漫才のようで読み進める中で自然と笑みがこぼれます。実際にこれらのような症状を抱えている人は、とても大きく大変な日常を過ごされているのだろうと想像がつく中で、この二人の関係性からは大きな救いを感じられ、心が温かくなってきました。人はそれぞれ事情を抱え、表面だけで判断できないし

んどさもち合わせています。この二人のように利害関係なく互いのことを支え合えれば、どのような状況の人も皆が幸せに共存共生できるはずだと思います。

(YK)

『カラフル』阿部曉子著 集英社 2024

本気にならない、それが高校生活3年間の目標。そんな伊澄が入学式当日であった六花は車椅子ユーザーだった。突然の病でミュージカルスターになる夢をあきらめざるを得なかった六花。靱帯断裂半月板損傷で、陸上エリートから脱落した伊澄。2人と、その周りのクラスメイトたちが、日々の高校生活の中で、ぶつかり合い、話し合い、認め合っていく。ぜひ読んで欲しい。そしてかみしめて欲しい。そんな本です。

(MT)

『深い河』遠藤周作著 講談社文庫 2021

過去にどこかのタイミングで推薦させて頂きましたが、いま久しぶりに読み進めていることもあり、この場で再度推薦させて頂きます。

主な登場人物は、大津、美津子、磯辺、沼田、木口。それぞれに一言では言い表すことができない様々な人生的背景を抱え、物語の半から宗教的多元性をもつインドという国で互いに交わり、それぞれが異なる形で「神」や「救い」、「愛」、「生死」、そして「人生の意味」という大きなテーマ

マに向き合っていくというストーリーです。

読むたびに、大津という登場人物の生き方について考えさせられます。この大津という人物は、キリスト者としての信仰を持ちながらも、その信仰の形や考えの違いから異端の烙印を押され、神学校から除籍されてしまっています。彼が行きついた先は、多様な宗教が混在するインド。神、イエス・キリスト、聖霊を信じる者でありながら、いわば宗教のつぼのような場所でも、なぜ大津は最期を迎えようとしたのか。彼が追い求め、死に直面してまで体現しようとしたのは一体何だったのか。今回も読み終わった後に、改めて考えてみたいと思います。

(RB)

『生物はウイルスが進化させた 巨大ウイルスが語る新たな生命像』武村政春著 講談社ブルーバックス 2017

生物で共生といえは生物基礎で出てくる「細胞内共生」が頭に浮かんできます。これは原核細胞に好気性細菌や光合成細菌が取り込まれ、共生し、ミトコンドリアや葉緑体となったという説。この本ではさらに、ウイルス(巨大ウイルス)が細胞に感染したときにつくる「ウイルス工場」が、なんと「核」の起源だという話が出てきます。またこの他にも、巨大ウイルス由来と考えられる細胞のしくみも紹介され、現在の細胞の誕生にウイルスが強く関わっていたことを示唆しています。

本書の最初の方はウイルスの系統の説明でちよつと難しいので、そこはサツと流して、最後の第4章を中心に読むのがおすすめです。生物を選出した人なら聞いた用語がたくさん出てきて、きつと面白く読めると思います。

(NN)

『「思考法」の必読書 50冊、1冊で図解してみた』鈴木博毅著 東洋経済新報社 2024

この本は、松蔭中高の図書館で「あ！おもしろそう！」と手に取り、実際、おもしろくて、おそらく借りるのは今回を含めて3回目になると思います。わたしが思うこの本のおもしろさは、次の通りです。その1 『思考法』というキーワードで、比較的、最近に話題になった本から、古くからあるとても有名な本まで取り上げられている。一度にこれだけの『思考法』に触れられるのは、大変お得な気持ちになる。

その2 もちろん、いわゆる文章表記の部分もあるが、基本的に「図解」されている。とてもシンプルで伝わりやすさを意識したまとめ方になっている。見てい

るだけで頭がスツキリする。その3 自分と向き合い、こころ静かに思考する時間のヒントがたくさんある。「人間関係がうまくいく思考法」「現代社会を生き抜く強さが身につく思考法」な

どが紹介されている。今回のテーマ「共存・共生」を考えるヒントになりそう。

本書のはじまりには、「新しい思考法を知ること、多くのすぐれた思考法を学ぶことは、人生を日々さらに良いものに変える力を与えてくれるのです。」と記されています。特に高校生のみなさんは、夏休みには、将来の進路について思考する時間が必要になるかと思えます。パラパラとページをめくる中で、「この考え方は参考になるな。」と感じる思考法に出会えるかもしれません。(Y Y)

『The Book of Five Rings (五輪書)』
Miyamoto Musashi 著

Shambhala Publications 2005
人生はどんな意味でしょうか？失敗してもそこから学ぶことがあるのでしょうか？哲学の興味がある方はこの本をお勧めします。いかがでしょうか？(S・M・U)

『ライオンのおやつ』 小川糸著 ポプ
ラ文庫 2022

もしも人生の終わりが近づいていたら、あなたは「最後に食べたいおやつ」を思い浮かべられるでしょうか？『ライオンのおやつ』は、余命を宣告された主人公・海野雫が、瀬戸内の小さな島のホスピスで静かに過ごす日々を描いた物語です。

このホスピスには「おやつの時間」という特別な制度があり、入居者は人生で一番好きだったおやつをリクエストできます。おやつを通して語られる人々の記憶は、どれも温かくて切なくて、命の輝きに満ちています。

本作は「死」と「共生」という重いテーマを扱いながらも、驚くほどやさしい語り口で進んでいきます。誰かの痛みを想像し、寄り添うこと。他人と時間を分かち合うこと。そして、生きるということ。「共にある」ことの尊さを、きつと心の深いところに残してくれる一冊です。(A K)

『沈黙の春』レイチエル・カーソン著 青樹
築一訳 新潮文庫 2004

科学者で作家でもあった作者は、農薬の使用が生態系に深刻な影響を与えることを明らかにし、自然と人間の共生の必要性を強く訴えた。「沈黙の春」というタイトルの、私たちに問いかけています。今のままで、未来に春は来るのか？科学だけでなく倫理や想像力の大切さを感じさせてくれる一冊です。(H K)

『蒼穹の昴』1-4 浅田次郎著 講談社文
庫 2004

清朝末期、列強の脅威と内政の混乱が渦巻く時代。『蒼穹の昴』は、そんな激動の中国を舞台に、貧しい少年・春児や科挙を志す梁文秀、そして西太后ら歴史上の

人物が交錯する壮大な物語です。この作品では、異なる身分、価値観、さらには異文化までもがぶつかり合いながらも、時に理解し合い、共に未来を築こうとする姿が描かれます。列強との軋轢の中で問われる「国と国との共存」、宮廷と民衆の間にある「立場の違いを超えた共生」。登場人物たちの選択や葛藤は、現代を生きる私たちにも通じる「共に生きることの困難さ」と希望」を投げかけてきます。『蒼穹の昴』は、歴史という大きな流れの中で、人と人、人と国家がどう共に在ろうとしたかを描く、まさに「共存と共生」の物語です。教科書で学ぶ歴史が、物語を通して「生きたもの」として立ち上がってきます。歴史好きの方は特におすすめです。ぜひ読んでみてください。(Y K)

『他者の靴を履く』ブレイディみかこ著
文春文庫 2024

これは『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の筆者である「ブレイディみかこ」氏が著した作品です。あとがきにはデヴィッド・グレーバー氏の言葉を引用し、「ときに自分の靴を脱いで他者の靴を履くことで自分の無知に気づき、これまで知らなかった視点を獲得しながら、足元にブランケットを広げて他者と話し合い、そのとき、そのときで困難な状況に折り合いをつけながら進む」こと

の必要性を記しています。読むのが少し難しいかもしれませんが、もしよければ手に取って読んでみてください。

(NO)

『隣の国の人々と出会う 韓国語と日本語のあいだ』斎藤真理子著 創元社 2024

『82年生まれ、キム・ジヨン』の翻訳者のエッセイです。韓国語を習っている人、大学で韓国語Ⅱ朝鮮語を学ぼうと思っている人にはぜひ読んでほしい一冊です。マル(言葉)、クル(文、文字)、ソリ(声)、シ(詩)、サイ(あいだ)に注目して韓国と日本の言葉や歴史を語っています。特に第5章サイ(あいだ)は興味深かったです。筆者は言います。「2つの言語、2つの文化のあいだにはやはり敷居がある(中略)片方からはその敷居が見えないことが多い。けれども、だからと言って、敷居が存在しないかのようにふるまうことはまちがっている。それを続ければ、いつか、自分の家を歩いていても、つまずくだろう。朝鮮半島と在日コリアンの歴史を知ることとは日本人にとって重要だ。」隣国と本当の意味で「共生」するためにはこの視点を忘れないようにしたいと思いつつ、今日もDMMで韓国語会話のレッスンをします。

『大学生が推す 深掘りソウルガイド』加藤圭木監修 一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編 大月書店 2024

この本はソウルのガイドブックです。しかし、普通のガイドブックとは違った視点を持ったとてもユニークなガイドブックです。大学生たちが「踏査(タプサ)」という実地調査をして、主要な観光地や注目スポットを歴史的な背景や韓国と日本の関係の視点から紹介していて、とても勉強になります。

日本にとつては「過去の出来事」かもしれませんが、それを忘れず残していこうとする韓国社会の取り組みを理解し、思いを受け止めてこそ、本当の意味での「共生」ができるのではないかと思います。次にソウルに行くときには、ぜひこのガイドブックを持っていこうと思います。この夏に韓国旅行に行こうと計画している人はもちろん、そうでない人も、ぜひ一度読んでみてください。

(KY)

『人生の壁』養老孟司著 新潮新書 2024

ときどき家族で生きる意味とは何か、と話したりします。結論は大体いつも同じで、「人間だけに課されるような大それた意味や責務などない。他の生物と同じく、すべての生き物たちのつながりの中で生きていくだけだ。」となります。養老先生の本を読み、あながち間違っていないな、とニヤリとした記憶があります。

クラスで、地域で、社会で、いろいろなコミュニティに属する私たちですが、「う

まくやる」には何かコツがあるようです。是非心を軽くするために読んでみてはいかがでしょうか。

(SM)

『沈黙の春』レイチエル・カーソン著 青樹築一訳 新潮文庫 2004

今年のテーマでこの本を推すのはあまりにもベタすぎるかもしれませんが、1962年の出版ということで、ちよつと古いかもしれませんが。ですが、そんなに前から化学物質の危険性を訴え、生態系への影響に言及していたことは、やはりすごいと言わざるを得ません。長い間、環境を考える原点として読まれ続けた本です。よければ、同じ著者の『センス・オブ・ワンダー』もどうぞでしょうか。

(HW)

『共依存』信田さよ子著 朝日文庫 2023

カウンセラーである著者が、実際に聞いた症例・韓流テレビドラマ・小説をサンプルに共依存を読み解いていく本です。例を挙げていることで、そうなのかあと思うこともありました。愛や善意は、いつでも善意になりうるのか?と考えさせられます。

(MS)

『奇跡の人』原田マハ著 双葉文庫 2018

1880年、アメリカに生まれたヘレン・ケラーの実話をもとにしたと思われる作品です。舞台は日本の東北で、目が見えない、耳が聞こえない、話せない少女が

家庭教師の安先生と言葉を覚えていく。三味線を弾く旅芸人の少女キワと友達になり、心を通わせていく過程も感動的です。

内容と直接関係はありませんが、表紙のイラスト、オデロン・ルドンの〈花に囲まれた二人の少女〉も素敵です。

(KS)

『砂丘律』千種創一著 ちくま文庫 2022

この本に収録されている短歌の舞台は、日本、それから、戦いの気配をまとった中東です。日本でも中東でも日常の何気ない情景を短歌にすることに変わりは無いのですが、だからこそその地の気候や文化、歴史、社会情勢などが一首の中に立ち上ってきます。

・アラビアに雪降らぬゆえただ一語 (Z) と呼ばれる雪も氷も

・深く息を、吸うたび肺の乾いてく砂漠はなんの裁きだろうか

解説は『宝石の国』の市川春子さんです。「短歌ってなんだか難しそう」と思う人も多いかもしれませんが、短い詩型だからこそ、豊かな鑑賞の世界が広がっています。

(YM)

『なぜ悲劇は起こり続けるのか 共生への道なき道を開く』鈴木文治著 ぷねうま舎 2019

教員経験もあり、牧師でもあった鈴木さんが「共生」をテーマに書いています。学校でもキリスト教会でも、共生という耳ざわりのよい言葉が頻繁に用いられます。しかし、現実には役に立たないものは排除する、共生には程遠い現実が横たわっています。そんな中でも、鈴木さんは「人権教育の徹底」、そして聖書に記される「イエス・キリストの共生の姿」に倣うことの大切さを訴えておられます。教育のこと、福祉のこと、教会のことに興味関心がある方に読んでほしいと思います。(津久井やまゆり園事件やホームレスのこと、ボランティアについても触れられています。)

『教会暦による説教集第3巻 聖霊の降臨』越川弘英著 キリスト新聞社 2006

教会で働く牧師・キリスト教学校や病院、福祉施設のチャプレン20人による、聖霊降臨日の説教集です。聖霊降臨日(ペンテコステ)とは、イースターから50日目にイエスさまの弟子たちに聖霊が降ったことを記念する日です。イエスさまは十字架にかかって3日目に復活し、弟子たちに現れたとされています。しばらくは弟子たちと一緒に過ごしてくれる復活のイエスさまですが、昇天してしまします。再びイエスさまを失った弟子たちは失意の中にあるわけですが、そんな彼ら

に聖霊が降るのです。彼らは聖霊に満たされ、(今まで話したことがない)ほかの国々の言語で福音を語ります。こうしてキリスト教は全世界に広められていくのです。聖霊の降臨がなければ、キリスト教の成立ありませんでした。突き詰めて言えば、キリスト教学校である松蔭が建てられることもなく、みなさんが出会うことありませんでした。クリスマスやイースターよりも知られていないであろう聖霊降臨日ですが、キリスト教学校に通うみなさんにはぜひ心に留めてほしい教会暦の一つです。

『ヒロシマ遡上の旅 父に捧げるレクイエム』川越厚著 本の泉社 2024

医師であり被爆2世である川越さんが、ヒロシマを訪れ、原爆そして軍人として被爆した父に向き合った記録が記されています。被爆から80年が経とうとする今、核廃絶実現どころか核兵器は増えているようです。被爆国に生まれた者として、この惨劇を学び、未来に伝えていくことこそが、世界の人と共に生きる第一歩なのではないかと思っています。

(RU)

『共生の意味論 バイキンを駆逐してヒトは生きられるか』藤田紘一郎著 講談社ブルーバックス1997

長い間ヒトの体内に生きてきた回虫などの寄生虫は、体内で栄養を横取りはするが、宿主であるヒトを殺して元も子もなくするような致命的な害はもたらさない

できた。ひるがえってヒトはどうだろうか？ おのれの繁栄のみを求めて、多様な生命の共存する地球生態系を壊し、今そのしつぺ返しを受けようとしているのではないか？ 共生のしくみと意味を理解し、生物において一見「悪」と思われる存在について見方を変えるときともに、地球において我々ヒトがどのように生きていくべきなのか考えてほしい。(TH)

『好き』を言語化する技術』三宅 香帆著
デイスカヴァー携書 2024

自分の推しなどがいたときに、「ヤバイ」だけで済ますのはもったいなくないですか？これからみなさんが生きていく中で人前で話すことはマストではないでしょうか？そんな時にきちんと伝える術を持つておくって大事なやないですか？そんなことに役立つ1冊だと思います。キーワードは「妄想力」みなさん日々妄想しているのでは？(KN)

『頭がいい人のChatGPT&Copilotの使い方』橋本大也著 かんき出版 2024

皆さんには、AIをただ排除するのではなく、上手に使いこなしながら付き合っていくってほしいと思います。
今回紹介する本は、「そもそもAIって何？」「ChatGPTの上手な使い方

は？」といった疑問への答えが、わかりやすく紹介されています。

内容は少しビジネス寄りではありますが、私たちの生活にも十分活かすことができます。たとえば、勉強でわからない問題を聞いたり、アイデアを考えたりするときに、AIはとても心強いパートナーになります。

近年、ChatGPTのような生成AIはどんどん進化していますが、それにもなつて問題も出てきています。だからこそ、大切なのは、AIとどう向き合うかという姿勢です。

これからの時代、AIと共存・共栄しながら、自分らしい使い方を見つけてほしいと思います。(MN)

『旅がなければ死んでいた』坂田ミギー著
KKベストセラーズ2019

いわゆるブラック企業で働き、ある日、意味もなく涙が止まらなくなり、吐血した作者が、このままでは死ぬ可能性がある、と危機感を覚え、自分を変えるために旅に出た。そんなエッセイ本である。口語体の大変軽い読み口で世界の様々なところで体験した出来事を描いている。情景が目につくので、前のめりで読むことができる作品なので、中学生でも読みやすいと思うが、内容が大変大らかで、なんというか、ざっくりぼろんで、ちょっと大人な内容も含むので高校生向けにしてみた。内容が時々ほんのちよつと猥

The Hundred Dresses
Eleanor Estes (著)
Harcourt, Inc. (発行)

This story is set in a small-town school in America and follows the life of Wanda, a Polish girl. Wanda wears the same blue dress to school every day and is teased by her classmates, but she keeps saying, "I have a hundred dresses at home." At first, no one believes her. However, as the story unfolds, the classmates begin to realize Wanda's true kindness, her artistic talent, and their own prejudices.

The English is relatively simple and the book is not too long, making it an easy read even for junior high school students who are not used to reading English books. Through the story, students can learn the importance of not judging people based on their appearance or cultural background, and of being considerate toward others. This moving story fits perfectly with this year's theme of "coexistence and living together," and leaves readers with much to reflect on. D・H

雑なのだけれど、笑いながら読めるのは、彼女の地に足のついた倫理観が見て取れるからだろう。こんな軽妙な地理の授業ができたらいいなあ……と思ってしまう。「20年後は何をしていたい？」という質問に対するケニア人（現地でつくった友人）の答えと章の結末が心にこびりついている。

『都市に侵入する獣たち』ピーター・アラゴナ著 築地書館 2024

クマが出たというニュースを聞くたびに、複雑な気持ちになる。そのクマが射殺されたと騒ぎ、市役所にクレームが殺到したと騒がれる。そのたびに、空しさを覚えてしまう。本書はアメリカの環境史学者である著者が都市生態系の歴史と未来に対する示唆をつづったものである。専門的でポリューミーな割にやわらかく読みやすい文章でつづられている。環境や動物に興味のある高校生はぜひ夏にじっくりと読んでほしい。(SM)

『ザリガニの鳴くところ』ディリア・オーエンズ著 ハヤカワ文庫 2023

数年前、山田先生に教えていただいたて読みました。すばらしい小説です。文庫になって手に入れやすくなりました。少女の成長物語、恋愛小説、殺人事件の犯人を追うミステリー……多彩な魅力に満ちています。何より特別なのは、舞台がアメリカ南部ノースカロライナの「湿地帯」

であるということ。主人公のカイアは水の世界をボートで移動します。湿地を好む大木、草、鳥や虫や魚や貝……なんと豊かな生態系、美しく静かな調和！物語に感動した後、私は余韻に浸りながら「湿地」について調べたりもしました。また、私はいつも、異質な存在、少数派、差別される側に惹かれますが、そういう意味でもとても魅力的な作品です。読めば自ずと「共存・共生」についても考えてしまうと思う。動物学者のオーエンズさんだからこそ、物語の世界は淡々と静かに冷静に描かれます。そこも素敵です。映画もよかったですよ！

若き日の著者と夫がカラハリの自然と暮らした研究の日々をつづったノンフィクション、『カラハリが呼んでいる』（ハヤカワ文庫NF）も傑作です。

『欲望の大地、果てなき罪』（上下）ピエール・ルメートル著 ハヤカワ・ミステリ文庫 2025

ピエール・ルメートル！『その女アレックス』（文春文庫）で衝撃を受けて以来、ずっと追っかけている作家さんです。『アレックス』のシリーズも、ゴンクール賞を受賞した『天国でまた会おう』（ハヤカワ・ミステリ文庫）のシリーズも、とってもいいです。

さて、「共存・共生」と言うからには、まず、自分や自分の属する社会とは「異なるもの」について知りたいですよね！！そこで、『欲望の大地、果てなき罪』です！

ルメートルさんの新しいシリーズが開幕しました。第二次大戦後、国家的スキヤンダルに巻き込まれる富豪一家。そもそもなぜこの一家は富豪なの？いつものようにルメートルさんのストーリーテリングは素晴らしい。それから、レバノン・パイルートとフランス・パリとベトナム・サイゴン（現ホーチミン）。白人と黄色人種。異なる世界、異なる人々の対比が鮮やかで、全く飽きない。たくさんの登場人物の人物造形も見事で、引き込まれ、一気読みでした。続きが楽しみです！

ポール・ボウルズ『シエルタリング・スカイ』（新潮文庫）や、マイケル・オンダーチェ『イギリス人の患者』（新潮文庫）、ユッシ・エーズラ・オールスン『アルファベット・ハウス』（ハヤカワ文庫）を、また読み直したいなとも思いました。

『夜と霧』ヴィクトール・フランクル著 みすず書房 2002

『これが人間か アウシュヴィッツは終わらない』プリーモ・レーヴィ著 朝日新聞出版 2017

人類は聖人の集団ではない。「共存・共生」とは対極の地点を目指した罪深い歴史も背負っています。知らなくてはならないし、「あの歴史」と比べて今はどうなのか、考えなくてはなりません。……というわけで、過去に何度か推薦したこともある本ですが、古典的名著を2冊追加します。強制収容所から生還した心理学者

フランクフル、化学者・作家レーヴィの声に、どうか耳を澄ませてください。

(MU)

『ぼくたちはChatGPTをどう使うか』 西岡竜誠監修 東大カルペ・ディエム著 三笠書房 2025

AIと、どう共存・共生するのか。これは、今の社会における大きなテーマの一つだと思います。この本では、ChatGPTを具体例として、現在のChatGPTをどのように活用することができ、何に気を付けなければならぬのかを、わかりやすく教えてくれます。AIは万能ではないので、結局は自分で考える重要性が問われていることはかわらないわけですが、何ができて何ができないのか、使ってみないことにはわからないと思います。

『あの国の本当の思惑を見抜く地政学』 社会部部長著 サンマーク出版 2025

地政学の基本的な考え方をわかりやすく解説することはもちろん、ロシアによるウクライナ侵略を含む、現実の国際紛争や戦争を、地政学の観点からわかりやすく解説してくれている本です。現実の国際社会をどのようにとらえ、その中で日本はどのように他国と共存・共生すべきなのかを考えるための重要な視点を提供してくれます。

(TS)

『ひとりだと感じたときあなたは探していた言葉に出会う』 若松英輔著 亜紀書房 2023

今、僕が好きな詩人、随筆家の方です。共存・共生を考えるときには、立脚点が自分に必要です。そのきっかけになるのではと思います。高校生にお勧めします。『人生で大切なたつたひとつのこと』 ジョージ ソーランドズ著 外山滋比古訳 佐藤由紀訳 海竜社 2016

昨年度、感銘を受けた書物です。人として何が大切なのかを教えてください。書物のようにはいかないものの、僕もそうありたいと思いました。共生・共存の成立の条件が、この本に記されています。ぜひ手に取ってください。

『転換期を生きるきみたちへ 中高生に伝えておきたいたいせつなこと』 内田樹編 晶文社 2016

何年か前にも高校生をイメージして、推薦した本です。共存・共存するためには、自分が「しっかり」していないといけません。(かく言う僕は、少しも定まらず、「しっかり」していませんが。)皆さんが大人になるときに、物事を考える人になつてほしいので、この本を推薦します。少し難しいかもしれませんが、背伸びしたい人にお勧めです。ひと夏かけて読むには良い本です。

(KY)

『女らしさは誰のため?』 ジェーン・スー、中野信子著 小学館新書 2023

「女性にとって最も高くもっとも打ち破りたいガラスの天井」2016年のアメリカ大統領選挙でトランプに敗れたヒラリー・クリントン候補のコメントは、自由の国アメリカ合衆国のジェンダーの壁を世に知らしめた。一方、世界「ジェンダーギャップ指数」の底辺記録を更新し続けるこの国の現実にはさらに重症ではないか。「女子アナ」というが「男子アナ」とは言わない。Blue Earth Projectのキャッチコピー「女子高生が社会を変える」は世に響くが、「男子高生こそが変えるのだ!」といくら叫んでも「ふーん。それで?」で結ばれよう。

テレビでもおなじみの脳科学者中野信子とコラムニストのジェーン・スーが軽妙に語り合う。小難しい私のコメントなどは無視してもらいたい。気負って読み通す必要はない。気楽に何度も読み返したらい書物だと思う。気になる箇所を幾度も振り返り湧きあがる気持ち味わうのだ。ジェンダーの多様性も認められつつある世の中であって、次の「新しい天井」が出現するかも知れないが、『個』であることと、すべてを自己責任で行うことは別の問題である」という一節に勇気づけられる。共存・共生の言葉の下ではなおさらである。

(NA)

『予想どおりに不合理 行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」』ダン・アリエリー著 熊谷淳子訳 ハヤカワ文庫 2013

ダイエットの決意をしたのに、お菓子が目に入ると明日からにしてしまう。別に欲しくもないのに、無料だから貰ったけれど、やっぱり要らないから捨ててしまふ。誰の日常にもよくある、こんな合理的でない判断の理由に、手がかりが示されます。

「行動経済学」という、比較的新しい学問分野があります。簡単に言うと、経済学と心理学が融合したもので、人間の心理・行動を読み解いて、マーケティングや各種政策などに活かします。そしてこれはまた、人間関係にも応用が可能です。どうにも理解できない相手や気の合わない相手と、うまくやっていくため、一緒に生きていくために、その心を知ろうとしてはいかがでしょう。もちろん、自分の心も含めて。

(RI)

『カラフル』阿部暁子著 集英社 2024

「でも私、車いすじゃないですよ。車いすを使っている車いすユーザーではあるけど」ときつぱり言う六花。一方、中学三年の夏に陸上競技をやめ、夢を失い、進むべき道を見失っていた伊澄。そんな二人の出会いには、お互いを刺激し、一人では見えなかった世界を広げていきます。

人それぞれ違いがあることを知り、理解し合うことの難しさと大切さが、とても伝わってくる物語。時折登場する元ヤンキーのさばけたお母さんと、見た目硬派な伊澄の会話も、テンポよくおもしろいです。

(NF)

『タフィー』サラ・クロッサン作 三辺律子訳 岩波書店 2021

物語は、父親のDV(家庭内暴力)から逃げてきた16歳の少女アリソンが、街をさまよう場面から始まる。行き先のないアリソンが迷い込んだ一軒家には、マールという老女が住んでいた。認知症を患っているマールは、アリソンを昔の親友「タフィー」と勘違いし、そこから奇妙なふたりの同居生活が始まる。マールが正常な記憶をとりもどすと通報されるかもしれない、とおびえながら、なんとか住む場所と食べ物確保する不安定な生活。アリソンの一人称語りで進んでいく物語は、詩のような、ごく短い文の連続でつむがれる(長い文章を読むのが苦手な人もよみやすい)。血のつながりもなく、年齢も離れている「ふたり」が関係をつくって、共に生きていく物語。

(KO)

『グレイス・イヤー 少女たちの聖域』キム・リゲット著 早川書房 2022

16歳になると魔力を持つとされ、少女たちは一年間森の中に隔離される。密猟者に見つかると殺され、仲間うちでも激しい嫉妬、同調圧力、差別、いがみ合いがあつて……。生き残っても望まぬ男と結婚するか、強制労働が待っている。一人では、自分の世代ではどうにもならないこともあるだろう。けれど時間がかかっても確実に、変えていこうという強さを、希望を感じられる小説です。Survive together or die alone(ともに生きるか、ひとりで死ぬか)。生き抜いたからこそ知ることができる頼れる味方。過酷な架空の物語ですが、不思議と共感できます。映画化進行中。

『カフネ』阿部暁子著 講談社 2024

最愛の弟をなくした薫子。弟の遺産を元恋人のせつなに渡そうとして断られる。自分の離婚問題など精神的肉体的にも限界だった彼女は断られたショックもあつて倒れてしまう。その時にせつながつてくれたものが至上の美味しきで：読んでいくうちにそれぞれの人物の抱える事情がわかってきて泣きそうになります。不器用な人たちの不器用なりに失敗しながら一生懸命生きていく人生。公式HPにレシピが載っています。美味しい料理と思いやりを召し上がれ。今年の本屋大賞受賞作です。

(YM)